

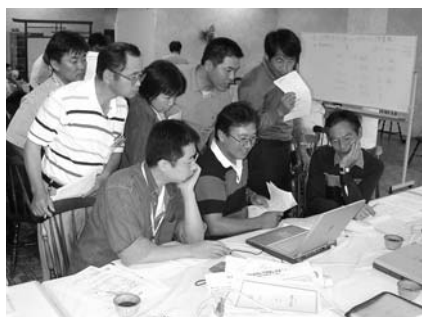
# 第4回小祝塾 北軽井沢編報告

## Report

### ■いつもと違う風景？

9月14日、農産生産者56名が北軽井沢に集まり、今年第4回目となる小祝塾が開催されました。今回の小祝塾1日目、ホワイトボードに数字が並び、グループごとの机のパソコンの前に生産者が腕を組んで立ち並ぶ。ちょっといつもと違う。みんながああでもない、こうでもないとはばかり、数字とにらめっこ、そんな風景が展開されています。

この日は塾長のおなじみ小祝政明さんから堆肥の配合割合と施用量についての講義からのスタート。良い堆肥を使うと、作物の品質が変化し、その使用方法によっても結果は千差万別となる。作るときは原材料に含まれる炭素(C)と窒素(N)の比(C/N比)に着目して、目的に合わせた堆肥を作ること。これが初日のにらめっこの理由でした。参加者の皆さん、例題を挙げてパソコンでC/N比を計算していたのですね。



CとNがこーなって…パソコン相手はまだまだ馴染まない？

### ■適量を推し量る

原料と水分率から理想的な配合割合を考えた後は、その施用量を導き出します。窒素率2.6%の堆肥が1tあれば窒素量は26kg。この数字、実際に使用したときはそのすべてが出ることはなくて、一部は土中での蓄えの窒素になります。だからC/N比25の堆肥とすると、小祝さんの考えでは利用率を係数として80%、差し引いて計算。

ほうれん草の標準窒素量を15kgとします。上の堆肥を使用した場合、100%窒素が効くとすれば必要量は576kgあれば足りませんが、80%しか使えないとすると、実際には721kgがほんとうの必要量。地温の違いによってもこの利用率は変わるそうなので考慮しなくてはなりません。なるほど〜、ムツカシイ！

でもこれは施肥設計する上ではとても大切で、しかも基本的なテクニック。計算上の数値が実際どの位効くかの予測を間違えると、最終的に、多すぎた施肥では過剰の害、逆に少なすぎれば不足の害となって現れるのですから……。

### ■結果が語る！堆肥は適正使用が不可欠だ

2日目は、今年かららでいっしゅぼーや農産管理課で進めている栄養評価についての報告。同課の吉田三千代さんから、社内でこれまで蓄積されてきた野菜の栄養価についての分析データが発表されました。

現段階での経過コメントとしたうえで、吉田さんは「ほうれん草では地温との関係で硝酸態窒素が増減する傾向がある」ことを指摘。測定値をカラーグラフで説明しながら、健全な堆肥を使っても高い硝酸値が出ているとすると、収穫時期の問題か、使う側の不安心理からついつい多めに使ってしまうとのコメントをいただきました。過剰にならない、控えめの施肥を心がけて欲しいとお話でした。

また情報交換の部では、春先から始まった小祝塾の中、高い評価を得ている栃木太陽の会・信末清さんの堆肥を今年試した方からの感想が報告されました。

旭昇園の石田さんは信末堆肥をか



第3回から会場としてご協力いただいている石田農園さんの圃場にて。

ぼちゃの株元へすじまき散布、苦土の補正をして結果を確認。生育は当初勢いよく伸び、ツルが伸び始めたときに干ばつがあり、花は咲いていたが実が付かないものがあつたとの話。元肥一本槍だったので、途中で肥切れてしまった感じだったそうです。かぼちゃのような場合、元肥一発では難しいようだ、扱い方をもう少し勉強しなくちゃいけないなどの感想。

斉藤農園の金谷さんは、信末堆肥を使って施肥設計をしたところ、いままではなかった、非常に良いにんじんができたとのこと。ごぼうについては初期生育は従来施肥の方がよかったが、一雨後の生育が逆転、目に見えて違う、良いものができたとのこと。ごぼうやにんじんでは、葉がしっかりしているので、病気を寄せ付けなかったとも。

「悪くなるケースとして、余分なものを入れている例が多いようです。入れれば入れるほど合計した肥料濃度は高くなってしまいます。入れなくて良いものは絶対に入れないとしたほうがいい。斉藤農園の金谷さんの所は最低量でしたが必要十分。過剰施肥が一番悪い。堆肥の長所と欠点を知る事が大切です。」最後に小祝さんから良い堆肥でも適正使用が必要ですよという話で今回の小祝塾が終了しました。

(事務局 竹内・鈴木)